

呼吸器内科紹介

—当院の呼吸器内科診療について—



呼吸器内科 常勤顧問 森高 智典

はじめに

当科では佐伯医師を中心に久保医師と森高の3人体制で診療を行っています。外来診療では横山医師と中村医師に支援いただいています。

診療は、気管支喘息、COPD、気管支拡張症、肺感染症、間質性肺炎、睡眠時無呼吸症候群、肺がんなどの疾患に対して呼吸器外科、放射線科、看護師、薬剤師、理学療法士、地域医療連携室と連携して行っております。

各疾患に対する検査や治療には目覚ましい進歩があり各職種とも最良の医療を提供できるように努めてまいります。

呼吸器内科での治療

呼吸器内科では咳嗽、発熱、息切れ、胸痛などの自覚症状や画像異常を指摘されて受診される患者さんに対し、迅速で的確な診断を行い、治療へ結びつけることを心がけています。

しかし、中には循環器疾患や消化器疾患が原因である場合もあり、他科と協力しています。

また、高齢化社会を迎え、疾患だけでなく生活背景を考慮した治療提供を心掛けています。

診療体制と症例カンファレンスについて

外来診療は月曜から金曜まで1日20～40名の受診があり入院患者数は7～15名程度で推移しています。

毎週、担当患者さんの画像、検査、治療方針についてカンファレンスを行っており、呼吸器外科症例についても回診に同席し、症例の経過や手術と気管支鏡の予定など情報共有しています。

各疾患ごとの最近のトピックス

各疾患ごとの最近のトピックスとして、難治性喘息に対する生物製剤、間質性肺炎に対する抗線維化薬、肺非結核性抗酸菌症の抗菌薬(AZM,AMK,吸入AMK)、肺がんにおけるゲノム診療や周術期治療などが挙げられます。今回は難治性喘息と間質性肺炎についてお話しします。

難治性喘息とは

難治性喘息とは、高用量の吸入ステロイド薬やその他の抗喘息薬を併用しても喘息が安定せず、頻繁に内服ステロイドが必要な喘息を指します。専門施設に通院している成人喘息患者の約15%が難治性喘息に該当するとされています。

近年、難治性喘息に対し各種生物学的製剤が適応となりました。病状、血液データなどから、どの生物学的製剤が最適なのか判断するには専門的な知識が必要です。当院では横山医師が精通しています。

間質性肺炎とは

間質性肺炎(かんしつせいはいえん)とは、肺の間質(肺の空気が入る部分である肺胞を除いた部分)を中心に炎症を来す疾患の総称です。

慢性的に緩徐に進行する疾患で経年的な肺活量の減少を認め、進行すれば息切れや咳といった症状が出ます。

近年、肺活量減少スピードを遅らせる薬剤(抗線維化薬)も登場しています。しかし、疲労やウィルス感染

を契機に急速に悪化し生命を左右する場合もあるため、ワクチン接種可能な人には各種ワクチン接種をお勧めしています。

原因として膠原病や粉じん吸入など特定できる場合とできない場合(特発性)があります。息切れや低酸素血症により在宅酸素療法を開始される患者さんもあります。

さいごに

当院は日本呼吸器学会連携施設、日本呼吸器内視鏡学会専門医制度認定施設、日本がん治療認定医機構認定研修施設、愛媛県がん診療連携推進病院となっており、呼吸器内科診療において研鑽し資格維持に努めたいと考えております。

そのためにも、輪番制の2次救急患者さん、地域の医療機関からの紹介患者さんをこれからも大切に診療したいと思います。検査、診断、治療など、患者さんをご紹介いただければ幸いです。

また、日常生活の中で気になる症状がございましたら、お気軽にご相談ください。



左から：久保医師、佐伯医師、森高医師（筆者）